

令和4年(2022年)6月10日

福寿大学講演会

井伊直弼い い なおすけを支えた儒学者 中川禄郎なかがわろくろうと善照寺ぜんしやうじ

彦根城博物館 北野智也

はじめに

- ・江戸時代後期の儒学者中川禄郎いみな(諱：禄、号：漁村、1796-1854)【資料1】
 - …彦根藩井伊家12代当主直亮なおあきが天保13年(1842)12月に召し抱え彦根藩井伊家13代当主直弼なおすけの政治思想や対外意識に大きな影響(直亮の世子であった直弼、藩主となった直弼への建言etc)
 - 直弼との関わりで取り上げられることが多い反面、禄郎という人物全体の把握は不十分
 - ・中川禄郎家文書と中川家伝来資料
 - …平成26年(2014)に寄贈いただいた古文書や書画などの資料群34点
 - 禄郎の思想をはじめ、幕末維新期の彦根藩政や彦根の文化を考える手がかりとなり得る
- ⇒彦根藩井伊家文書や中川禄郎家文書などの分析を通して、①禄郎の生涯や人柄、②思想、③善照寺との関係を読み解く

1 禄郎の生涯

(1) 藩儒中川禄郎の誕生

…これまでほとんど取り上げられなかった禄郎の前半生に迫る

◎「漁村中川先生行状」(彦根市立図書館蔵)

…安政2年(1855)11月、禄郎の門人 田中芹坡たなかきんばが記した禄郎の経歴書

- ・大らかで真摯、外見を飾らず、老若分け隔てなく親しむ
- ・顔を崩して大笑いする癖、鐘の音ほどに大きな声

〈禄郎誕生から藩儒となるまで〉 cf. 【資料2】

寛政8年(1796)3月9日：彦根藩士で国学者のおはらきみお小原君雄の家に誕生

文化10年頃(1813頃)：薩摩村の善照寺ぜんしやうじの寺侍てらざむらいであった

中川勘解由家かげゆの養子となる(10代後半)

江戸や長門など諸国を遊学（20代前半）

文政5年(1822)：遊学からの帰途、京都で終生の師と仰ぐ

頼山陽と猪飼敬所に師事（27歳）

小原家の跡継ぎを望まれるも固辞 ※1

文政9年(1826)：中川勘解由家を相続

天保元年(1830)：湖岸に書齋「水雲茅舎」（「梅花書屋」とも）

を設ける（35歳）

天保13年(1842)12月18日：「御儒者役」として十人扶持で

召し抱えられる（47歳）

勘解由家は息子（虎）が相続

天保14年(1843)3月8日：松嶋林兵衛跡屋敷（餌指町）を拝領（48歳）

12月7日：「御系譜御用掛」を命じられる

※1「中川禄郎等書状一括」（彦根市立図書館蔵）【資料3】

…禄郎が子どもに宛てた手紙や父の君雄からもらった手紙などを一括
〈藩主直亮も認める秀才〉

（直亮が）禄郎の身分の事を御尋ねになり、「兼ねて秀才と聞き及んで
いる」とのこと。随分油断なく精勤するよう、自分（直亮）が（禄
郎を）秀才と申し居る事を（君雄が禄郎に）申し遣わすよう、よく
よく（君雄が直亮から）命じられ、そなた（禄郎）の身分ではめで
たき義である。私（君雄）も実は大いに悦んだけれども、（直亮の）
御前ゆえ、（禄郎は）それほどでもない旨、（直亮の）御褒美に恐れ
入る旨を申し上げた〔傍線部〕

(2) 藩儒禄郎の活躍

〈藩儒となった後〉

弘化4年(1847)11月：世子直弼（33歳）の依頼を受けて

「蒨蕘之言」を献上（52歳）

嘉永元年(1848)12月19日：「三諫録」の写本を献上（53歳）

嘉永3年(1850)11月21日：直弼が藩主となる

12月20日：江戸参府を命じられ、侍講を命じられる（55歳）

嘉永6年(1853)6月3日：浦賀にペリー率いる米軍艦隊が現れる

7月頃：対外意見を述べた「籌辺管見」を献上（58歳）

<p>8月29日：「別段存寄書」を幕府に提出</p> <p>11月：病に倒れる</p> <p>安政元年(1854)3月：ペリー率いる米軍艦隊が再来航、日米和親条約調印</p> <p>12月2日：禄郎が亡くなる（59歳）</p>

〈藩主直亮の世子直弼〉

- ・ 直弼が世子として必要な政治思想や知識などを習得するのに深く関わる
…「葛藁之言」、「三諫録」 etc
 - ・ 江戸在府中の直弼の資金援助を仲介 【資料4】
…嘉永3年6月28日：禄郎が直弼に宛てた書状
 - ・ 明性寺が代官元^{もと}の石原勘介（彦根藩足軽）と心を合わせ、大津の宇野七兵衛から直弼に、5年の間毎年400両ずつの献金を提案 cf. 1両=13万円とすると、毎年5200万円
 - ・ 藩主直亮の深刻な病状…「御隠退も間も有間敷」
 - ・ 「姦邪の者」（石原）は御前（直弼）に取り入る事に気を配るため、しばしば（直弼の）藩政の障りにもなる事を、何とぞお心得なさるよう願う → 献金の提案を断るよう主張
- ⇒ 直弼への資金援助の仲介 + 献金者の見極め

〈藩主直弼〉

- ・ 藩校改革を企図
…彦根藩の藩校稽古館（1799-、弘道館）の弊風を改革
- ・ 直弼の対外意識に大きな影響を与える
…アメリカの開国要求に対して、開国することでアメリカとの当面の戦闘を避け、通商を通じて海軍を鍛錬し、状況が許せば再び鎖国に戻す可能性を主張（「籌辺管見」）

2 禄郎の思想

(1) 直弼との交わり

○ 「葛藁之言」や「三諫録」にみる

「葛藁之言」（弘化4年(1847)） 【資料5】

- …世子直弼(33歳)に「人君」の道について意見を求められた禄郎(52歳)が私見をまとめて献上した書物（全4巻20編）。
 - ・ 巻1：君主論、幕藩関係における井伊家の家格や彦根藩の立場 etc

- ・巻2：藩主と家臣の関係、儉約や諫言を聞き入れる重要性etc
- ・巻3・4：藩が直面している政治的課題への対応（藩校改革etc）
- …武家政治に関する歴史書や「御家ニ懸り候記録」を読むよう勧める
ぶとくたいせい き りゆうえいひかん じょうきゆう き せいけ びだん
 （武徳大成記、柳 営秘鑑、承 久 記、井家美談etc）

→陽明学などの政治思想書や経世書が含まれない

特定の学派に偏らない、歴史認識に基づく政治意識の構築を促す

「三諫録」（嘉永元年(1848)） 【資料6】

…禄郎(53歳)が歴史書の中から家臣による諫言の具体例をまとめ、世子直弼(34歳)に提出した書物（全9冊）

…「其最所尽心者三諫録也」（「漁村中川先生行状」）

嘉永元年に提出後も編纂が続けられる

⇒具体的な事例や歴史に学ぼうとする強い意識・姿勢

○「籌辺管見」にみる

海外情勢を知る禄郎 【資料7】

…当時の西洋事情を学べる良書として地理学者のみつくりしょうご箕作 省 吾が記した
こんよ ずしき「坤輿図識」やこんよ ずしきほ『坤輿図識補』などを直弼に紹介

「籌辺管見」（嘉永6年(1853)） 【資料8】

…ペリーがもたらしたアメリカ国書への対応を記した禄郎の意見書

→注目すべき禄郎の意見と「別段存寄書」の相違

①「琉球で直接通商を行いつつ」

④「天候不良などで滞留する際はオランダ商館に宿泊させる」

…通商によって富国強兵を図ろうとする強い意識

アメリカとの直接的な通商（オランダと同列の位置付け）

⇒西洋事情への関心・造詣

アメリカとの軍事格差を直視、富国強兵に向け新たな対外関係の構築

(2) 藩士たちとの交わり

藩校改革の意見書

…①弊風の原因は指導する側にあるとして、上位の者がまずよく学び、
 好学の風儀を行き渡らせること

②彦根藩が諸藩の模範たるべく、幕府が官学と定めた朱子学を教学の
 核に据えること

…禄郎にとっての漢詩・文の意味

「朱子学を悪数学ひ候へ者、道学之弊と申、一弊御座候而、一己之禅僧の如く、偏陋ニ流、人情・世態ニ疎く、国家之用ニ立不申、…徂徠ハ此弊を知り、詩文を以人才を教育し、寛大ニ被教候ハ尤成義かと奉存候、…詩会・和歌会等ハ君臣和楽・上下親睦之一助ニも相成哉ニ奉存候、士大夫弓馬の余暇花鳥風月ニ性情を吟詠し、朋友と交談致し候事武士の美俗と奉存候」

- ・朱子学をはじめ学問だけを学ぶと、弊害として、視野が狭まり、人情や実際の世の中に疎くなり、国家の用に役立たない
- ・そのため、荻生徂徠は漢詩・文で人才の教育を図った
- ・詩会や和歌会などは上下親睦の一助にもなり、武士が余暇に朋友と交わる美俗である

⇒学問に固執せず、漢詩・文により、視野を広げ、世情を知ること
人と交わること、心情を表現しあうこと を重視

3 禄郎と善照寺

薩摩の真宗寺院である善照寺（現彦根市薩摩町）

○中川家と善照寺 cf. 【資料2】

- ・「同（明和）六年(1769)家司中川勘解由政芳二世臣ノ約ヲ成シ、門前数畝ノ地ヲ買テ小宅ヲ造立シ与フ」（「当寺来由帳」（善照寺蔵））
- ・「拙者（中川禄郎）先祖中尾仁兵衛、元和元卯年(1615)被召抱、御元方御勘定役被仰付、夫より代々御勘定役相勤、祖父嘉蔵儀も同様御奉公申上候処、安永二年巳(1773)六月御勘定人不残御暇被下置、其節より苗字中川と相改メ、流浪罷在候処、御領分え立入之儀蒙御赦免候ニ付、愛知郡薩摩村善照寺ニ奉公仕候」（「侍中由緒帳」（当館蔵））

⇒中川家（当時は中尾姓）が藩の元方勘定所に属する勘定人を勤めていた頃から、中川家と善照寺は深い関係にあった（中川家は勘定人を罷免された後、流浪の末、縁のある善照寺に向かった？）

○善照寺の寺侍となった中川勘解由家

- ・中川勘解由家は善照寺の事務方を勤めたと見られる（元勘定人であったため？）
- ・禄郎のその後の遊学費用を工面？

- ・少なくとも、中川勘解由家は禄郎の息子である虎の代まで、善照寺の寺侍を勤めたと見られる
- ・その後、明治4年(1870)頃には、中川勘解由家は中川禄郎家に組み込まれる（これ以降の中川家と善照寺との関係は不明）

おわりに

禄郎の人柄や基本姿勢

- ・大らかで真摯、外見を飾らず、老若分け隔てなく親しむ
 - ・顔を崩して大笑いする癖、鐘の音ほどに大きな声
 - ・筋を通す実直さ
 - ・物事を具体的に、現実的に捉え、広い視野で向き合い、対応する
- 幕末維新时期に活躍する門人たち惹き付け、育てた禄郎の魅力

幕末維新时期の彦根を考える上での重要人物

様々な論点で今後の研究を大きく進める可能性（藩校、思想、門人）

今後新たな資料の発掘により、善照寺との関係もさらに解明できる？

主な参考文献

- ・『彦根城博物館叢書6 武家の生活と教養』彦根城博物館、2005年
- ・母利美和『幕末維新の個性6 井伊直弼』吉川弘文館、2006年
- ・角省三『近江の埋もれ人 中川禄郎・河野李由・野口謙蔵』
サンライズ出版、2017年
- ・『企画展図録 中川禄郎ー井伊直弼を支えた儒学者』
彦根城博物館、2021年